

インドシナの「目撃者」 近藤絃一のまなざし

まもなく、3年ぶりにベトナムを訪れることになった。1999-2000年の全国交通計画(VITRANSS)、2002-2004年のホーチミン都市交通計画(Houtrans)に続く、VITRANSS2の事前調査だ。ベトナムの喧噪もちらほらと脳裏を横切るようになり、早速、書店で見かけた沢木耕太郎「(ベトナム) 一号線を北上せよ」文庫本を購入した。そこで取り上げられていたのが、近藤絃一の著書であった(具体的にはホーチミンのマジェスティックの記述が印象的)。8年前からベトナム業務に関わっていたのに、近藤絃一の名前を目にしたのはこれが初めてである。若干の興味を持って、まず1)「サイゴンのいちばん長い日」を購入した。久しぶりの手応えのある内容。びっくりして、

- 2)「サイゴンからきた妻と娘」
- 3)「バンコクの妻と娘」
- 4)「目撃者」(単行本)(古本)
- 5)「パリへ行った妻と娘」(古本)
- 6)「妻と娘の国に行った特派員」(古本)

を立て続けに購入し、読んだ。1986年1月に惜しくも45歳で癌死されたこともあり、近藤絃一の本が巷に多く流布したのは1980年代半ばまでであったのだろう。上記の半数が絶版である。今のインドシナ情勢を考慮すると、近藤の記述とのギャップも多く、致し方ないかも知れない。しかし、近藤の文章は心底から湧き上がる”passion”に裏打ちされた説得力と抱腹もののユーモアが俊逸である。シリーズの「妻と娘」三部作(上記2), 3), 5)は多少デフォルメされた親娘三人の人間関係を楽しく筆にしているが、ベトナム業務を抱えた身としては、やはり1), 6)や、4)のインドシナ関連記事を興味深く読むことになる。

近藤絃一の絶筆は、6)の「ベテラン記者の死」(参考：<http://www.awm.gov.au/people/2684.asp>)と思われるが、同じ「インドシナ屋」記者として因縁深い再会・離別の事実には、深い感傷を覚えることになる。

近藤が活写したサイゴンの様子も、今の活気あるホーチミンと重ね合わせると、この20年の歳月の紆余曲折を実感せざるを得ない。確かに公安による情報操作や、日常的取り締まりはあるのだろうが、実態としてはサイゴン陥落前の様子とそれほど変わらないのではなかろうか？ 今、近藤が生きていれば、かかる状況をどう解釈しただろうか？ かの国は今や、中国とも、カンボジアとも、そしてラオスやアメリカとも友好的関係を作り上げ、日本にとっては重要な製造業のアジア工場の役割も果たしている。こんな国際貿易状況は、近藤の想像範囲外であったかも知れない。

存命であれば今年、67歳。インドシナを見つめ続けたジャーナリストとして極めて貴重な存在であったはず。その文章の流麗さからも、道半ばの生涯は大変残念である。もっと生きていてほしかったし、今のインドシナの、世界に誇る成長過程を見守ってほしかった。

以上